

妙一女御返事

弘安三年七月一四日 五九歳

問うて云はく、日本国に六宗・七宗・八宗有り。何れの宗に即身成仏いず そくしんじょうぶつを立つるや。答へて云はく、伝教大師の意は唯法華經に限り、弘法大師の意は唯真言に限り。問うて云はく、其の証拠如何。答へて云はく、伝教大師の秀句しゅうくに云はく「当に知るべし、他宗所依しよえの經には都て即身入すべ無し。一分即入そくしんにゆうすと雖も八地いちぶんそくにゆう已上はつち いじょうに推して凡夫身を許さず。天台法華宗のみ具つぶさに即入の義有り」云云。又云はく「能化・所化俱りやっこうに歴劫無し。妙法經力即身成仏す」等云云。又云はく「当に知るべし、此の文に成仏する所の人を問うて此の經の威勢を顕はすなり」等云云。此の釈の心は、即身成仏は唯法華經に限るなり。

問うて云はく、弘法大師の証拠如何。答へて云はく、弘法大師の二教論に云はく「菩提心論ぼだいしんろんに云はく、唯真言法の中に即身成仏する故は是三摩地法これさんまじほうを説くなり。諸教の中に於て欠きて書せずと。喩して曰く、此の論は竜樹大聖の所造千部の論の中に秘藏肝心の論なり。此の中に謂はく諸教とは、他受用身及び變化身等の所説の法、諸の顕教なり。是三摩地法を説くとは、自性法身じしやうほっしんの所説しよせつ、秘密真言の三摩地の行是なり。金剛頂こんごうちやう十万頌の經等と謂ふ是なり」と。

問うて云はく、此の両大師所立しよりゆうの義水火なり。何れを信ぜんや。答へて云はく、此の二大師は俱に大聖なり。同年に入唐して兩人同じく真言の密教を伝受す。伝教大師の両界じゆんぎやうの師は順暁和尚、弘法大師の両界けいかの師は恵果和尚なり。順暁・恵果の二人俱に不空の御弟子なり。不空三蔵は大日如来六代の御弟子なり。相伝と申し本身といひ、世間の重んずる事にちがつ日月のごとし。左右の臣にことならず。末学の膚にうけて是非しがたし。定めて悪名天下に充滿し、大難を其の身に招くか。然りと雖も試みに難じて両義の是非をきゆうめい糾明せん。

問うて云はく、弘法大師の即身成仏は真言に限ること、何れの經文何れの論文ぞや。答へて云はく、弘法大師は竜樹菩薩の菩提心論に依るなり。問うて云はく、其の証拠如何。答へて云はく、弘法大師の二教論に菩提心論を引いて云はく「唯真言法の中にのみ乃至諸教の中に於て欠きて書せず」云云。問うて云はく、經文有りや。答へて云はく、弘法大師の即身成仏義に云はく「六大無碍ろくだいむげにして常に瑜伽ゆがなり。四種の曼荼まんた各離れず、三密加持すれば速疾に顕はる。重々にして帝網ていもうのごとくなるを即身と名づく。法然とし

て薩般若を具足す。心王心数刹塵に過ぎたり。各五智無際智を具す。円鏡力の故に
実の覚智なり」等云云。

疑って云はく、此の釈は何れの経文に依るや。答へて云はく、金剛頂経・大日経等
に依る。求めて云はく、其の経文如何。答へて云はく、弘法大師其の証文を出だして云
はく「此の三昧を修する者は現に仏菩提を証す」文。又云はく「此の身を捨てずして神
境通を逮得し大空位に遊歩して身秘密を成ず」文。又云はく「我本より不生なるを覚
る」文。又云はく「諸法は本より不生なり」云云。難じて云はく、此等の経文は大日経
・金剛頂経の文なり。然りと雖も経文は或は大日如来の成正覚の文、或は真言の行者
の現身に五通を得るの文、或は十回向の菩薩の現身に歡喜地を証得する文にして、猶
生身得忍に非ず、何に況んや即身成仏をや。但し菩提心論は、一には経に非ず。論を
本とせば背上向下の科、依法不依人の仏説に相違す。

東寺の真言師日蓮を悪口して云はく、汝は凡夫なり、弘法大師は三地の菩薩なり。汝
未だ生身得忍に非ず、弘法大師は帝の眼前に即身成仏を現ず。汝未だ勅宣を承けず、
大師にあらず、日本国の師にあらず等云云是一。慈覚大師は伝教・義真の御弟子、智証
大師は義真・慈覚の御弟子、安然和尚は安慧和尚の御弟子なり。此の三人の云はく、法
華天台宗は理秘密の即身成仏、真言宗は事理俱密の即身成仏と云云。伝教・弘法の兩大
師何れもをろかならねども、聖人は偏頗なきゆへに、慈覚・智証・安然の三師は伝教の
山に栖むといへども、其の義は弘法東寺の心なり。随つて日本国四百余年は異義なし。
汝不肖の身として、いかにが此の悪義を存ずるや是二。答へて云はく、悪口をはき、悪
心ををこさば、汝にをいては此の義申すまじ。正義を聞かんと申さば申すべし。但し汝
等がやうなる者は物をいはずばつまりぬとをもうべし。いうべし、悪心ををこさんより
も、悪口をなさんよりも、きらきらとして候経文を出だして、汝が信じまいらせたる弘
法大師の義をたすけよ。悪口・悪心をもてをもうに、経文には即身成仏無きか。但し慈
覚・智証・安然等の事は此又、覚・証の兩大師、日本にして教大師を信ずといえども、
漢土にわたりて有りし時、元政・法全等の義を信じて、心には教大師の義をすて、身は
其の山に住すれども、いつわりてありしなり。

問うて云はく、汝が此の義はいかにしてをもひいだしけるぞや。答へて云はく、伝教
大師の釈に云はく「当に知るべし、此の文は成仏する所の人を問うて此の経の威勢を顕
はすなり」とかゝれて候は、上の提婆品の我於海中の経文をかきのせてあそばして候。
釈の心はいかに人申すとも、即身成仏の人なくば用ふべからずとかゝせ給へり。いかに

も純円一実の経にあらば即身成仏はあるまじき道理あり。大日経・金剛頂経等の真言経には其の人なし。又経文を見るに兼・但・対・帯の旨分明なり。二乗成仏なし、久遠実成あとをけづる。慈覚・智証は善無畏・金剛智・不空三蔵の釈にたぼらかされてをはするか。此の人々は賢人・聖人とはをもへども、遠きを貴んで近きをあなづる人なり。彼の三部経に印と真言とあるにばかされて、大事の即身成仏の道をわすれたる人なり。然るを当時叡山の人々、法華経の即身成仏のやうを申すやうなれども、慈覚大師・安然等の即身成仏の義なり。彼の人々の即身成仏は有名無実の即身成仏なり。其の義専ら伝教大師の義に相違せり。教大師は分段の身を捨てゝも捨てずしても、法華経の心にては即身成仏なり。覚大師の義は分段の身をすつれば即身成仏にあらざるとをもはれたるか。あえて即身成仏の義をしらざる人々なり。

求めて云はく、慈覚大師は伝教大師に値ひ奉りて習ひ相伝せり、汝は四百余年の年紀をへだてたり、如何。答へて云はく、師の口より伝ふる人必ずあやまりなく、後にたづねあきらめたる人をろそかならば、経文をすてゝ四依の菩薩につくべきか、父母の譲り状をすてゝ口伝を用ふべきか。伝教大師の御釈無用なり、慈覚大師の口伝真実なるべきか。伝教大師の秀句と申す御文に、一切経になき事を十いだされて候に、第八に即身成仏化道勝とかゝれて、次下に「当に知るべし、此の文は成仏する所の人を問うて此の経の威勢を顕はすなり、乃至当に知るべし、他宗所依の経には都て即身入無し」等云云。此の釈を背きて、覚大師の事理俱密の大日経の即身成仏を用ふべきか。

求めて云はく、教大師の釈の中に菩提心論の唯の字を用ひざる釈有りや不や。答へて云はく、秀句に云はく「能化・所化俱に歴劫無く、妙法経力即身成仏す」等云云。此の釈は菩提心論の唯の字を用ひずと見へて候。問うて云はく、菩提心論を用ひざるは竜樹を用ひざるか。答へて云はく、但恐らくは訳者の曲会私情の心なり。疑つて云はく、訳者を用ひざれば法華経の羅什をも用ふべからざるか。答へて云はく、羅什には現証あり、不空には現証なし。問ふて云はく、其の証如何。答へて云はく、舌の焼けざる証なり。具には聞くべし。求めて云はく、覚・証等は此の事を知らざるか。答へて云はく、此の両人は無畏等の三蔵を信ずる故に伝教大師の正義を用ひざるか。此則ち人を信じて法をすてたる人々なり。

問うて云はく、日本国にいまだ覚・証・然等を破したる人をきかず、如何。答へて云はく、弘法大師の門家は覚・証を用ふべしや。覚・証の門家は弘法大師を用ふべしや。

問うて云はく、両方の義相違すといへども、汝が義のごとく水火ならず、誹謗正法と

はいわず、如何。答へて云はく、誹謗正法とは其の相貌如何。外道が仏教をそしり、小乗が大乗をそしり、権大乘が実大乘を下し、実大乘が権大乘に力をあわせ、詮ずるところは勝を劣という。法にそむくがゆへに謗法とは申すか。弘法大師の大日経を法華経・華嚴経に勝れたりと申す証文ありや。法華経には華嚴経・大日経等を下す文分明なり。所謂已今当等なり。弘法尊しと雖も釈迦・多宝・十方分身の諸仏に背く。大科免れ難し。事を権門に寄せて日蓮ををどさんより但正しき文を出だせ。汝等は人をかたうどとせり。日蓮は日月・帝釈・梵王をかたうどとせん。日月天眼を開いて御覧あるべし。将又日月の宮殿には法華経と大日経と華嚴経とをはすとけうしあわせて御覧候へ。弘法・慈覚・智証・安然の義と日蓮が義とは何れがすぐれて候。日蓮が義もし百千に一つも道理に叶ひて候はゞ、いかにたすけさせ給はぬぞ。彼の人々の御義もし邪義ならば、いかに日本国の一切衆生の無眼の報ひをへ候はんをば不便とはをぼせ候はぬぞ。

日蓮が二度の流罪、結句は頸に及びしは、釈迦・多宝・十方の諸仏の御頸を切らんとする人ぞかし。日月は一人にてをさせども、四天下の一切衆生の眼なり、命なり。日月は仏法をなめて威光勢力を増し給ふと見へて候。仏法のあぢわいをたがうる人は日月の御力をうばう人、一切衆生の敵なり。いかに日月は光を放ちて、彼等が頂をてらし、寿命と衣食とをあたへて、やしなひ給ふぞ。彼の三大師の御弟子等が法華経を誹謗するは、偏に日月の御心を入れさせ給ひて謗ぜさせ給ふか。其の義なくして日蓮がひが事ならば、日天もしめし、彼等にもめしあはせ、其の理にまけてありとも、其の心ひるがへらば天寿をもめしとれかし。

其の義はなくして、たゞ理不尽に彼等にさるの子を犬にあづけ、ねづみの子を猫にたぶやうにうちあづけて、さんざんにせめさせ給ひて彼等を罰し給はぬ事、心へられず。日蓮は日月の御ためには、をそらくは大事の御かたきなり。教主釈尊の御前にて、かならずうたへ申すべし。其の時うらみさせ給ふなよ。日月にあらずとも地神も海神もきかれよ、日本の守護神もきかるべし。あへて日蓮が曲意はなきなり。いそぎいそぎ御計らひあるべし。ちよせさせ給ひて日蓮をうらみさせ給ふなよ。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。恐々。

七月十四日

日蓮花押

妙一女御返事